
恋のキューピッド君

わたるくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋のキューピッド君

【Z-コード】

Z5716Z

【作者名】

わたるくん

【あらすじ】

高校に入学してから三か月が経つた。クラスでの俺の立場と言つたら、教室でゲームをしたり、ラノベを読んだりしているキモいヲタク君。

そんな俺こと、上木幸司に舞い込んできたのは、ヲタクという不本意なレッテルを張りやがった女の子の恋愛のお助け！？

なんで、そんな嫌いなヤツを助けなくちゃならないんだ！ 俺は断固拒否するぞ！

絶対、絶対だからな！！

……とか言いつつ、結局巻き込まれる男のお話。

高校生活つてシラいよね？（前書き）

他に書いた小説とは違い、初めての一人称に挑戦してみました。
やつぱり恋愛が絡んでくると一人称の方が主人公の思っていること
が表現がしやすかったり（笑）

高校生活ってシラによね？

「なあ、上木^{かみき}のヤツまた教室でゲームやってるぜ？」友達が一人もいないからつて寂しいヤツだよな」

「仕方ないんじゃないか？あまり人と話さないタイプみたいだし、見た目もダサいじゃん。女子にもキモがられてるみたいだし、あんなヤツと仲良くしたら、俺たちまで同類だと思われるって」

「ハアア……また俺のことを貶す声が聞こえてくる。入学してからもう何ヶ月か経ってるのに、お前等よく飽きないよな。そんな教室の扉の前で話なんてしないで、言いたいことがあるなら、面と向かつて言えつてんだ。」

「でもよ、上木も災難だよな。香澄^{かすみ}にまで目を付けられて、クラスの女子全員からアタクつて呼ばれて嫌われるんだぜ？」俺なら耐えられないね」

「うるせえ、口だけの同情なんていらねえんだよ。香澄にイビられてないお前等なんかに、俺の気持ちなんて分からないだろうぞ。もう、なんていうかね？」教室の隅で女子グループが集まつてヒソヒソ話しているだけで、俺の悪口言われてるような気分になるんだよ。その時は、わざと寝たふりなんかしてるが、耳だけは俺の意思に反して、無意識に女子たちの会話を盗み聞きしようとすると。

……結局、聞こえないんだけどな。

なつ？お前らにこの切なくて虚しい^{むな}気持ちを理解できる訳がねえだろ。

「それに……つー？」

「おい、急にどうしたんだよ……つー？」

おつと二人が黙り込んだ。これはアレだな。アイツの『』登場つてわけか？

「ちょっと、アンタ等。教室のドアの前に立たないでくれる？ ち

よー邪魔なんですけど？？」

ソプラノボイスの奏でる澄んだ声と共に、一人の女子が教室に入つてくる。

緩いウェーブがかつた長い髪は茶色に染められており、校則つて何だつて？と思わせるほどの、足を露出させた短いスカート。おそらく特殊な趣味でもないかぎり、ほとんどの男が彼女の顔を可愛いと言うだろう。正直、見た目だけなら雑誌でモデルやってますと言われても信じてしまうくらいだ。

そう、彼女が俺の天敵、香澄恋歌かすみれんかだ。

クラスでは、その持ち前の姿と明るさで人気があるようだが、俺からみたら嫌な女もいいところ。

すべてが悪いとは言わないが、香澄のせいで俺がクラスからハブられたのは間違いないと思っている。

昼休みに一人でゲームやつてたくらいで『上木が一人でゲームやつてるよ、アイツつてヲタクなんじゃない？』なんて噂流しやがつて。何故それくらいでヲタクのみならず、キモ男おという烙印まで押されなければならないのか……俺にはまったく理解ができない。最近は、ラノベとかゲームが好きというくらいでヲタク扱いされるんだから、嫌な世の中になつたもんだぜ。

昔のことを思い出してたら、さつきの男一人組が黙つて道を譲つたな。アイツ等もクラスじゃあそれほど目立つ立場じゃないからな。香澄から見れば、好まないタイプなんだだろうぞ。

クソッ……本当にムカつくヤツだぜ。

そんなお互いを嫌つてた関係だつたのに、なんだつてあんなことに……。

俺が高校に入学してから一ヶ月の時点で、すでに来年のクラス替えを夢見ていたのだ。

それが、あんな横暴ギャルに振り回される高校生活を送るハメに

なるなんて……誰が想像できただろうか。
すべては始まりは、学校から変人と揶揄やゆ。されている、あの先輩か
ら始まつたことだった。

高校生活について語り合おう？（後書き）

まだまだ序章もいいところなので、最後までお付き合いしていただけたら嬉しいです。

いつもと変わらない朝？

.....

聞きなれた電子音が鳴り響き、俺はいつものように目を開きました。重い目蓋を開くと、窓から覗く陽光が目に入ってくる。春から夏に移り変わる、この季節特有の暖かな温もりにより、ベッドから出たくない衝動に駆られる。だが、カーテンの隙間から漏れ出る刺激するような眩しさに、寝ぼけた意識が覚醒していく。

「ああ……
柱木彌だ」

すでに何度もセリフを吐いたかなど、記憶にない。

ただ入学してから今日まで一日一回言つたとすると、最低六十回は言つた計算になるな。これはもうアレじやね？ 俺の中でベスト・

アーヴィングは、流行語大賞はなーせまー勢いだよ
アーヴィング、アーヴィング、アーヴィング

えてんだよ。

言葉通り、
憂鬱な気持ちを抱えたまま起き上がり、支度を始めた。

今日は六月十二日の月曜日だ。

再び、新たな一週間が始まると思うと、気が重くなる。
（ハナセキイチウ

なぜなら、俺こと、上木幸司は学校でハブられてはいるからだ。暴力やイジメとまでは言わないが、女子からはヲタクキモイという烙印を押され、男子からはそんな女子に嫌われたくないと距離を置かれてしまっている。

その事実を最初に知ったときはショックだつた。

今まで友達が多かつたとは言わないまでも、小さいころからの付き合いがあるヤツや、同じゲーム好きのヤツなんかと、中学生の時までは楽しく過ごすことができていたのだ。

そんな俺が、家族の事情によつて実家から遠く離れた高校に入学

したため、周りに昔から仲の良かつた友達が一人もいなくなってしまった。元々、あまり人と「ミニミニケーション」をとる事が苦手な俺としては、初めて出会いのヤツに自分から声を掛けることすら躊躇つてしまふ。

しかし、そんな俺の事情など知らないかのように、周りの連中は日が経つごとにどんどんグループ化していく。仲のいいグループという強固な防御フィールドに守られたメンバーの中に入していくなんて、さらに難易度が跳ね上がるだろう。特に俺みたいなヤツからしたら、そんなフィールドは突破不可能だ。

仕方がないから、一人でも発動できるATTフィールドを展開するしかなかつた訳だが……アレ？　いま、俺上手いこと言つたよね？

高校に入学して一週間、そんな俺は『ぼっち』な状況に追い込まれていた。

そんな俺の学校での暇つぶしと言えば、昔から大好きなゲームだつた。寂しさを紛らわせるために、仕方なく教室でゲームをプレイしていた。

その時だ。あの女の捌け口という名の犠牲になつてしまつたのは、
その女の名前は

香澄恋歌。

入学した当初から、アイドル顔負けな美貌と天真爛漫な性格で、たちまちクラスで頭角を現してきた。

今では女子たちの中心に躍り出て、イケてる男子たちに持て囃されていいるのだ。香澄が一言、アイツが嫌いと言つただけで、そいつはクラスでの居場所がなくなると言つても過言ではないだろう。

……実質、俺がその立場を確立してしまつたんだがな。

あの時の迂闊な自分を殴つてやりたいぜ。一度イメージが定着したら、そこから抜け出すのは簡単じやないからな。香澄は自分の思い通りになつて楽しいんだろうが、俺からしてみれば、本当に溜まつたもんじやねえつーの。

そんな状況でも入学から一ヶ月が経つた。

慣れとまでは言わないまでも、それが当たり前の日常だと思えるくらいには。

それでも一週間が始まる月曜日の朝は嫌いだ。誰が好んで友達が一人もいない学校に行かなくちゃならないんだと、気落ちする。のろのろと準備を終えて、玄関にたどり着いた。

「ああ……鬱だ」

俺は、再び何度も咳いたか分からぬほどのセリフを吐きながら、玄関の扉を開けて一步を踏み出す。

今日も、いつもと変わらない生活が始まると考えたまま。

厄介な先輩とHンカウント？（前書き）

ようやく本筋に入つた。

厄介な先輩とHンカウント？

希望である夏休みまで残り一ヶ月に迫った、六月の朝。

玄関から一步外に出るだけで、季節にはまだ早いような蒸し暑い熱気に入包まれた。

空を見上げれば、雲ひとつなく晴れ渡っている。燐々（さんさん）と輝く太陽が、辺り一面に光を降り注いでいるかのよう。

俺は未だに清新しい制服を着込み、大きく深呼吸をした。

クラスでの嫌な連中から解き放たれ、少しだけ清々しい気分になつてくる。今から学校に向かうまでの道中は、周りを意識する必要もなければ、無理に気を使う必要すらもないのだから。

俺の通う鷺峰高校は、住んでいるアパートから徒歩十五分の場所にある。本当ならもつと近い部屋を借りたかったのだが、親が友人らの遊び場になるといけないからと、少々離れた賃貸アパートにされてしまった。

今考えると、両親の心配は杞憂わじみねだつたかもしれない。

なぜなら、友達のいない俺の家に、誰かが遊びにくるなんてミラクルが起きる訳がないからな。

……あつ、自分で言つて悲しくなつてきた。

入学したばかりの頃は、これから始まる高校生活に淡い期待を抱いていたこともあった。可愛い彼女が出来たらと、大きな夢を抱きつつも、せめて女の子の友達ぐらいならと現実的な希望も持つていた。そんな現実的な夢なのに、どうしてこうなつてしまつたのか。

……いや、理由は分かるんだけどさ。なんかこう、認めたくないことだつてあるよな？ 理解はしても納得はできないみたいなさ。

通学路を歩いていると、目の前の角から俺の通う高校の制服を着た女の子が顔を出した。長い黒髪をまっすぐに伸ばし、腰のあたりにある毛先が、歩く動きに合わせてコラコラと踊るかのように舞つ

ている。

俺は彼女のことを知っている。

遠目でも分かるような細く纖細なスタイル。スカートから伸びるスラッとした長い足。すべての男が思わず振り向いてしまうような美しい尊顔。それはまるで、この世の美といつものすべてを引き集めたかのような女性。

弥富朱音さんだ。

彼女のことを、鷺峰高校で知らぬ者はいないだろう。友達がいな俺でも、周りの会話を盗み聞きしているだけで何度も聞いたからだ。

今までこんなに間近で見たことはなかつたが、さすがは噂の弥富朱音さんだと納得してしまう。こんなに美しい人だったら、男たちはそら夢中になるだろう。

彼女は出会つた角を曲がり、俺の前を悠然と歩いている。そんな華麗に歩く後姿からなかなか目を離すことができない。特にスカートの中から伸びるキレイで染み一つない真っ白な太ももから。自分も彼女の歩幅に合わせながら、マジマジとした視線で見つめていると、突然彼女が歩みを止めて、後ろを振り返つた。

俺もつい足を止めてしまい、その場で立ち竦んでしまう。

「ねえ、キミ」

清涼で涼しげな印象を受ける声がかかる。

人によつては少し冷たいと感じる人もいるかもしれないが、俺にしたら“弥富朱音”という手の届かない至高の華といつイメージにピッタリの声だらう。

「ねえ、キミつてば」

ん？ イメージ通りの美声に少し考えてしまつたが、誰かに声を掛けているのか。こんな美人さんに話しかけられて無視するなんて、けしからんヤツだな。

「あなた、聞こえてないの？」

まだ無視してんのか……そこまでいつたらもはや焦らしプレイだ

る。俺なら舞い上がるくらいテンションが上がるのに。

「自分が話しかけられてるって気づいてないの？ そこにボーッと

突つ立つているキミよ、キミ」

なんか、弥富さんがこっちを指をしてくれた。俺の後ろにいるのか、仕方がないから退いてやるか。

俺は立っていた場所から移動して、道の端に寄った。

ツー。

アレ？ 弥富さんの指がこっちを追いかけてくる。なんでだ？

「キミ……それ、わざとやつてる訳じゃないよね？」

何か俺を見ながら話しかけてくるぞ。…………つて、まさか俺！

？ とつ、とりあえず間違いかもしれないから聞いてみるか。

「あの、まさかキミつて俺のことですか？」

「そうそう。話しかけても無視されっぱなしだからどうしたもんかと思つちやつたわ」

どうやら本当に、道路の壁にナメクジのようになに寄り添つていて話しかけていたらしい。でも、何でだ？ 別に彼女とは知り合いじゃないし、もちろん友達でもないんだが。

……もしかして、今までずっと見つめていたことがバレてて注意するために話しかけたとか！？ しまった！！ なんという失態を犯してしまったんだ。ここままじゃあ、下手するとクラスだけじゃなくて、学校全体から白い目で見られる」とになるぞ… ここは謝つて許してもらうしかない…！

「すっ、すいませんでした。もつあなた様には近づかないし、視界にもいれないよつに気をつけるので、ここは許してください…！」

思いつきり頭を下げる。最悪、土下座してもいいとすら思つ。

「何を言つてるのか全然分からないけど、たぶんキミが思つてゐるなことじやないから気にしなくていいわよ？」

えつ、そうなの？ 良かったああーこれから高校生活がさらな

る暗黒時代に突入するかと思つたぜ。

でも、そうじゃなかつたら何で俺なんかに話しかけたんだ？ 自分の言うのもなんだが、クラスの偽アイドルである香澄恋歌^{かすみれんが}とは違つて、全校男子生徒の中で正真正銘のアイドルと化している弥富朱音さんに話しかけられるような男じゃないと思つんだが俺は。

「うーん、突然聞くんだけどさあ、キミつて今、部活とかに入つてる？」

本当に突然だ。まったく脈絡すらもない。理由は分からないが、別に答えられない質問ではない。

「いえ、入つてませんが、それがそうかしましたか？」

それを聞いた途端、目の前にいる彼女は一瞬だけ笑みを作つたかと思うと、

「それじゃあ、今日の放課後に部室棟にある110号室に来てくれる？」

「えつ……なぜですか？」

「質問に質問で返さないでね。言つておくけど、来なかつたらさつきまで私のことヒッチな目で見てたこと、学校中に言つふらすわよ？」

「ブツ……」

言われたことが信じられず、吹き出してしまつた。

つてか、なんで俺が謝つたのか理解してるじゃありませんか、弥富朱音さんよ。そんなこと言われたら後が怖くて行くしかないじゃないですか……。

「わつ、わかりました。謹んで行かせていただきます……ですから学校に言いふらすことだけは、『勘弁を』

「うんつ、よろしく。最後のはキミが本当に来たら考えるわ。それじゃあ放課後に部室で待つてるわね」

それだけを言い残し、彼女は走つて行つた。

未だに壁際で突つ立つたまま動けない俺を放置して。

……どうして、こうなつた。こうなつてしまつては、彼女の言つ

とおり放課後会いに行くしかないだろ？

ようやくフリーズから立ち直った俺はいつものセコフを呟いた。

「ああ……鬱だ」

ポツリと呟いた俺の声は、誰にも聞こえないまま、その場で巻き起しきつた風に吹かれてかき消されてしまった。

結局何なんですか？（前書き）

やつぱり 一人称って難しいです。

結局何なんですか？

ついに、ついに、この時間が訪れてしまった。

授業もすべてが終わり、これから弥富朱音さんやとみあかねの待つ部室に行くことになると思うと、足に鉄球が付いたように重くなる。

今日も以前と変わらない“ぼっち生活”を送っていたのだが、時折聞こえてくるヒソヒソ声も、悪口のような言葉もまったくと言っていいほど耳に入らない。この後に待ち受けるものが何もなければ、ある意味、普段よりも落ち着いた平穏だったのかもしれない。

そう感じてしまつほど、俺の心は不安でいっぱいだった。

本当に彼女は何の目的があつて、自分なんて男を誘つたのか。おそらく彼女が誘いを掛ければ、大半の生徒がホイホイと応じるだろう。

これほど生徒がいる中、何故俺に声を掛けて部室に招待されたか、一日中考えても答えはでなかつた。

じのような場合、普通なら怪しんで行かないところなのだが……。

今回、俺は逃げ道を潰されているのだ。

弱冠、脅迫めいたやり方で。

俺は、仕方なく教科書などの荷物をカバンに纏めると、いつもより暗いオーラを撒き散らしながら教室を後にする。そして、そのままの足取りで指定された部室棟110号室さかねやへと向かつていった。後ろから、クラスメイトが再び何かを囁きあつているような声もガン無視して……。

扉の上に貼り付けられたプレートには、書式も分からぬような字で、『CLOUD ROOM 110』と書かれている。

ドアノブに手を掛けて、大きく息を吸う。

ここに入つたら、すでに引き返すことはできないだらう。万全の

覚悟を持つていないと、どうなるか分かつたものではない。

限界まで息を吸つたところで、今まで溜めた酸素を一気に

吐き出す。

——よしひー！ 入るか！！

心の中で覚悟を決め、ついに扉を開けた。

「ここにちは、ようやく来たわね

花の咲くような笑顔で挨拶された。やばい……彼女の顔を見ただけで、覚悟が折れてしまいそうなんだが……。

改めて見ると、やはり綺麗な人だと思う。一人きりしかいない部屋の中にいるだけで、意識したくもないのに顔が少し赤くなつてしまふのが分かる。手で顔を押さえる訳にもいかないので、顔の火照りに気づかないでいてくれることを祈るばかりだ。

「さあ、まずはその椅子に座つてちょうだい

細く纖細そうな指が部屋の中心に置かれている丸テーブルへと向かっている。結局何をしたいのかは分からぬが、とりあえず言われた通りにセットになつてている椅子に腰掛ける。

すると、弥富さんも俺と対面になるように椅子に座つた。

「それではまず、お互いの自己紹介といきましょうか。たぶん知っていると思うけど、私の名前は弥富朱音よ」

ほぼ初対面の人に『私のこと知つてると思つけど』つてどれだけ自信持つてんだ？ まあ、結局知つているから、自信過剰でも何でもないんだが。

「今度はキミの番よ？ ネクタイの色が緑だから、今年入学してきた新入生よね？」

弥富さんはネクタイが赤いから一年生ですよね？

……なんて、気軽に聞き返せる訳ねえだろうが。こちとら学校一有名な人を目の前にして、いっぴいいっぱいなんだよ。なんて言えばいいのか分からんが、見た目の差と雰囲気の差に負い目を感じるんだよ。たぶん他の男が同じ状況になつたら同じことを思つはず。

「はい。一年生の上木幸司です」

仕方なく無難に返答してみる。

「ヤハ!…… もう名前も聞いたから、幸司くんを舐こよね? んを!」
呼んだのは他でもありません

学校一番の美人さんにつ……名前、名前で呼ばれた！ なつ、な
んてこつた。友達の一人もできないラタクなキモ男^おなのに、そんな
嬉しいことがあつていいのか！？

自分でキモ男って言いたかった

「幸司くん、ちゃんと話聞ってる？」

「はつ、はい！ 大丈夫です、ちやんこ

さすがに違うこと考えていたことを看破され

俺は弥富さんの言葉へと耳を傾け、聞く体勢を整える。

「ちせんと聞きますつて今まで聞いてなかつたつて」となね?」

「トニツカニシテ」 挑戦の精神で「トニツカニシテ」

! !

「あー、なあーいんだけどー

なんとか無事に乗り切つたみたいだ。何か、怪しむような冷たい

目線がこちらに向いているが、気にならなければいい。

「話が中々進まないから、先にあなたをヒーロー呼んだ理由から言つ

わね？」

ついに来た……。俺がここに呼ばれた理由。

大事な話なのか、神妙な顔をする弥富さんの眞面目な雰囲気に飲

まれば身体が硬くなつたよ。は動かなくなつてからには緊張のせいか、ゴフリと主睡を飲み入る。

「……それよね？」

それは？

「幸司くんに恋愛の手助けをしてほしいの」

一瞬、俺は何を言われたか理解が出来なかつた。弥富朱音さんが

？ 誰もが知る有名なあの弥富朱音さんが？？ そんな人に好きな人がいるなんて……。

「嘘おおおオオオオオオオオオオオオ！」？

思わず大絶叫。たぶん、部室塔すべてに響き渡るのではないかと思つほど、悲鳴にも似た驚愕の声。

一
ちよこと
五用蠅い！！

俺の声に両手で耳を押さえながら、文句を語りてくれる。

「たつて、学校のアイドルである弥富さんですよ!? そんな人には好きな男がいるなんて、誰だつて叫びたくなりますよーー！」

卷之三

俺の言葉を聞いて、理解ができないかのような不思議な表情で、首を「テン」と傾げる。しかし、だんだんと俺が言つた言葉の意味を理解したのか、弥富さんの綺麗な顔が朱色に染まっていく。

「ちつ、違うって！ 私の恋愛じゃなくて、他の人の恋愛を手伝つてほしこうてこと…。」

今度は、俺が頭を頑張る番だ。うう。

「おほんっ、つまりね？　自分で言うのもなんだけど、私って顔も良いし、スタイルもいい。ついでに性格も良くて、男女関係なく好かれる立場なのよ」

普通なら「何を言つてゐんだこの女」と思つかもしれないが、弥富さんだつたら納得してしまつのが驚きだ。他の女子がこんなこと言つたら、鼻で笑つてしまふだらう。

「でね、よく女の子が私のところに恋愛相談に来る訳。好きな人がいるんですけど、どうしたらいいですか？」って相談ぐらいなら構わないのだけど、一番困るのが告白できるように手伝ってくださいって頼み事なのよ」

女子の間ではそんなことがあるのか……。まあ、咲白の手伝いつてのは珍しいかもしだれないが、弥富さんほど人望があれば、ないともないのだらうや。

でもそれが、おれと何の関係があるんだ？

「はあ……弥富さんも大変そうですね。あまり俺には関係ないやつ

「話ですが……」

「何言つてるの？ 最初にお願いした
たちの手助けをしてほしいんだけど」

えっ、この先輩ったら何言つちやつてくれてんの？ まだ女の子
と付き合つたこともない俺がそんなことできる訳ないじやないで
すか。

「そもそも何で俺なんですか？ 弥富さんほどの人なら、他に頼むことができる人なんていくらでもいますよね？ 何か俺じゃないといけないような理由があるんですか？」

「えっ、別に理由なんてないけど?」
「はっ??」

ちょっと待て、落ち着け。俺。弥富さんは何を言つたんだ。理由

いやつてそんなことはないはず……って、

「何で！？ 何か理由がなきや会った事も話した事もない俺なんかに頼むことじやないでしょ！？」

興奮のあまり、早口で息継ぎもないまま言い切った。
そんな俺を見ても、弥富さんは落ち着いて返答する。

「本当に理由なんてないのよ。 しいて言えば、朝歩きながら悩んでた時に、たまたま幸司くんが目に入つたからかな。 私だけ他人のこ

「いな？」
とて懶むのもアレたてだから
みた
あの人も巻き込んでおこう！

「そんな適当な……ってか、アレって言われても分からないんです

「ん~と、面倒とかつかつかって意味?」

「人から相談受けといて、面倒とか言わないでくださいよ」

「あっ、言い忘れてたけど、断つたら私をエッチな目で見てたこと、

学校中に言いふらすからね。元々、この部屋に幸司くんが来たら言

いふらすかどうかは考へるつて言つただけだし、断られたら私が困るから……別にいいよね？」

すでに、目の前に座る人に對して溜め息しか出でこない。周りの話を聞く限りでは、みんなに人気のある女性や尊敬する先輩という話だつた。最初はその見てくれから俺も勘違ひしていたが、面と向かつて話したら分かる。

この人 すぐ適當で、面倒で、自分勝手な人だ！！

正直、詐欺さきにでもあつた氣分である。しかし、まだ俺は救われた方だつ。あくまでクラスメイトの話を盗み聞きしただけで、最初からあまり彼女のことを見らなかつたのだから。

この性格が学校で噂になつていなのは、おそらく意図的に周りに隠しているからだつ。これほど適當な性格の人なら、生徒や先生から信頼などされるはずがないし、尊敬もされないに決まつている。

結局、俺はえらい貧乏クジを引かされただけみたいだ。

弥富朱音やとみあかねの本当の性格を知れて嬉しい？

学校のアイドルと呼ばれるほどの美女とお話ができるて楽しい？

アホか。

こんな逃げられもしない、面倒なことを押し付けられてそんな気持ちになる訳ないだろうが。

ここはやつぱり、いつものセリフを言つておかなければならぬだつ。

「ああ……鬱だ」

そう呟いた瞬間、部室の扉がガチャリと開いた。

結局何なんですか？（後書き）

「いや、まだ読んでいただきありがとうございます。誤字・脱字や、おかしな表現があれば教えていただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5716z/>

恋のキューピッド君

2011年12月20日18時48分発行